

教育研究グループ「研究結果」報告書

報告日 平成31年4月19日

グループ名		フリガナ 代表者氏名	スズキ 鈴木 シンサク 伸作
学校名 (代表者)	大田区立中萩中小学校	電話番号	03-3744-2800
研究テーマ	支え合いの学習を通して、わかる・できる体育指導の工夫		
研究期間	平成30年4月1日 から 平成31年3月31日 まで		
研究結果 の概要	<p>研究経過</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究主題、組織、研究方法の確認 研究主題「支え合いの学習を通して、わかる・できる体育指導の工夫」 領域：器械運動(マット運動、マット遊び) ・全体構想図、検証方法、年間計画の作成 ・実技研修 7月5日(木)、10月19日(水)、12月21日(金) ・授業研究 9月10日(月)高学年(マット運動)、11月27日(火)低学年(マットあそび) 1月31日(木)中学年(マット運動) ・研究全体会 本年度の授業のまとめ <p>研究結果</p>		
※詳細は別 紙により 報告	<p>低、中、高学年の3本の研究授業と2回の実技研修を通して、本研究主題に迫ること、授業前の児童アンケートと授業後の児童アンケートを比較すると、「マット遊び、マット運動が好き」と答えた児童の増加が見られた学年があった。それよりもあまり好きではない児童が多少なりとも減少した学年があった。まだまだ、1年間の研究の成果は顕著に出てはいないが、得意でない児童も「やってみたら楽しかった」「友達と助け合ってできるようになった」という声も聞かれ、本校の教員が1年間の研究を通して、授業が改善され、児童が「わかった、できた」という実感を味わえたのではないかと考える。</p>		
その他 特記事項	平成31年より2年間、大田区教育委員会研究推進校として指定を受けた。 令和2年度に研究発表を行う予定。		

1, 研究主題

支え合いの学習を通して、わかる・できる体育指導の工夫

2, 主題設定の理由

○研究の経緯より

28年度は、前年度の研究の視点や仮説を見直し、理科では、①「やってみたい」「確かめてみたい」と思わせる予想の共有 ②分かりやすい観察・実験 ③考察につながる結果の整理 生活科では、①問題提示の工夫 ②体験的な活動の工夫 ③伝える場の工夫 に重点を置き、同様の研究テーマ、教科で研究を深めることとした。29年度は、一人一人がいろいろな方法で考えたことを表現する力を身に付けることで、さらに思考力・表現力を伸ばすことができるのではないかと考え、研究に取り組むこととした。生活科では、気付きの質に目を向けて考えることで教師の発問の精選や子どもの気付きにつなげることができた。理科では、結果をグルーピングしたり、比較したりすることによって、視覚的に整理され、考察に生かすことができた。しかし、課題として、生活科では、気付きにつながるような視点を意識した教師の声掛けをしていくこと、理科では、考察の内容の質を高めていくためにも自分の予想を振り返ったり、結果と見比べたりする活動を充実させる必要があることなどが課題として残った。

以上のように、思考力・表現力には課題が残っており、体育的な面での児童の実態としては、積極的に運動する児童とそうでない児童の二極化や体力の低下が見られている。さらに、どのように指導すれば効果的なのか、いまの活動が今後どのような動きにつながっていくのかという見通しをもてなかったり、指導に不安を感じたりしている教師もいることから、30年度の研究については、体育の教科で研究に取り組むこととした。研究推進委員会では、体育の様々な領域で研究を進めるのではなく、領域を決め、系統立てた指導を見通すことでその学年に応じた力を付けることができるのではないかと考えた。

○児童の実態

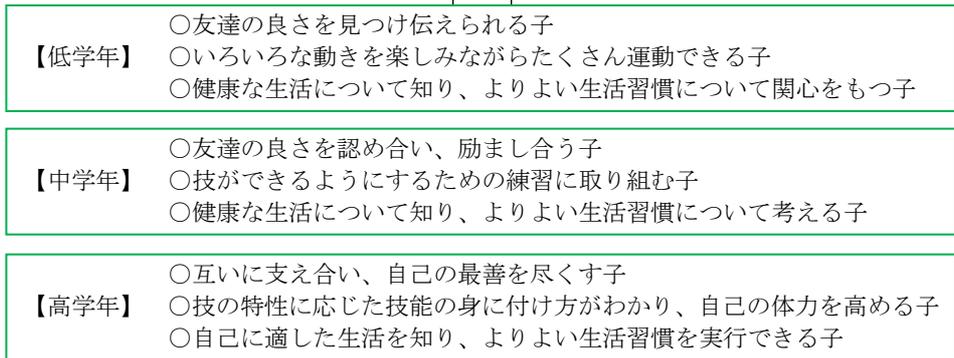
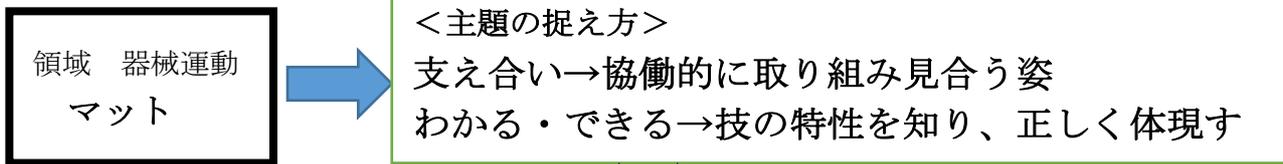
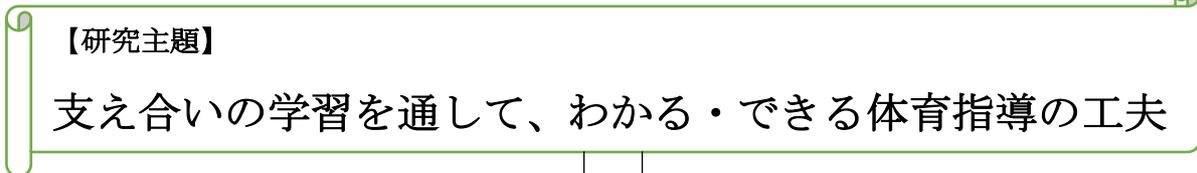
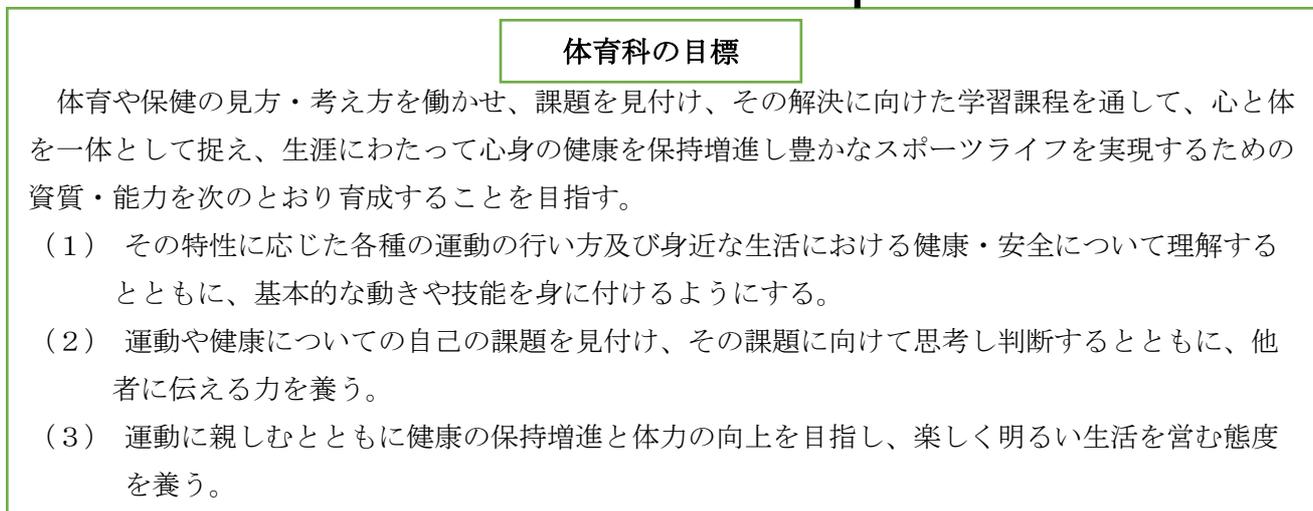
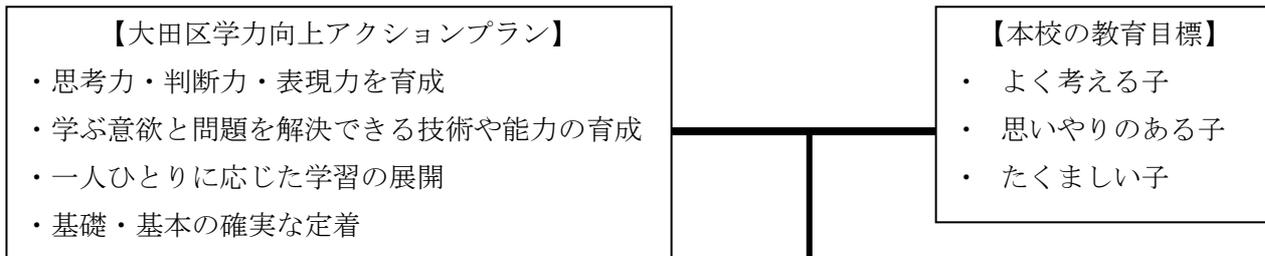
- ・2年間の理科・生活科の研究を通して、児童の思考力、表現力が伸びつつある。
- ・体力が低下している学年がある。
- ・入学前に身に付けるべき運動が身に付いていない児童がいる。
- ・学年に応じた系統立てた動きを習得できていない児童がいる。
- ・苦手意識から体育への意欲が低下している児童がいる。

○教師の実態・思い

- ・思考力・表現力は、体育でも重要。分かることと、できることは違う。
- ・互いに認め合い、支え合いながら運動の楽しさを味わってほしい。
- ・体育指導において教師側に苦手意識や指導の不安を感じている領域がある。

以上の理由から、30年度は体育科で「支え合いの学習を通して、わかる・できる体育指導の工夫」を目指し、研究を進めることとした。

3, 研究の構想



4, 目指す児童像に迫る手立て

(1) 運動の特性を知るための提示の工夫

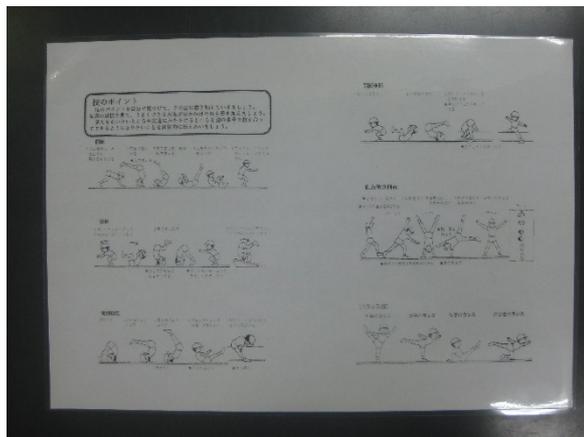
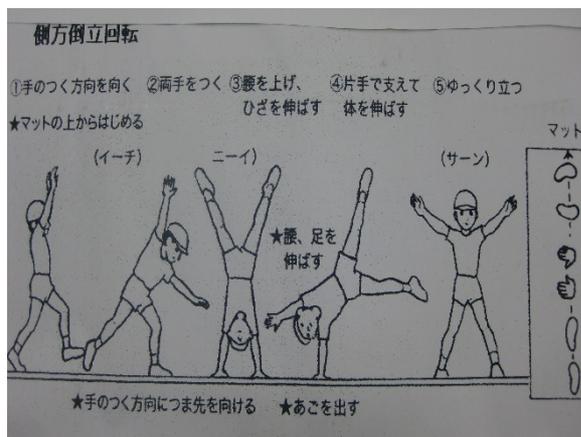
低学年

- 単元の導入時に掲示物(写真)で模範演技や動きのポイントを見せることで、正しい体の動きを知ることができるようにする。
- 教師が体の部位の使い方を助言することで、子どもたちが意識的にその部分を動かすことができるようになるきっかけを作る。



中学年

- 技のポイントには番号を振って細かく掲示し、児童が自らの課題を捉えたり、友達にアドバイスしたりしやすいように工夫する。
- 学習カードにもイラストを用いて、児童がめあてを立てやすいようにする。



高学年

- 単元の導入時にタブレットや掲示物で、模範演技のポイント見せることで、正しい体の動きを知る。
- 模範演技は、見る視点を予め伝えることで、学級で共通するつまずきやすい課題を把握させる。
- 教師が体の部位の使い方を助言することで、子どもたちが意識的にその部分を動かすことができるようになるきっかけをつくる。



(2) 支え合いが深まる手立ての工夫

低学年

- ・教師が子どもたち一人一人の動きを知ることで、支え合いが深まりやすいペアを構成する。
- ・構成されたペアでお互いに動きを見合い、友達の上達したところやよさを積極的に伝え合う場を作り、できたところには、シールを貼り達成感を味わわせる。
- ・友達の良さを見つけ、言葉かけができるようにポイントカードを作成する。



中学年

- ・活動時は、見合う時間と課題別練習の時間の2つに分ける。見合う時間は、異質グループで組み技能を平均化する。
- ・複数で活動し、友達の技を多角的に見合いアドバイスができるようにする。
- ・個人のめあてを具体化・記録化するために、学習カードを活用する。また、自分のめあてをふせんに書き、グループ内でめあてを共有化する。



高学年

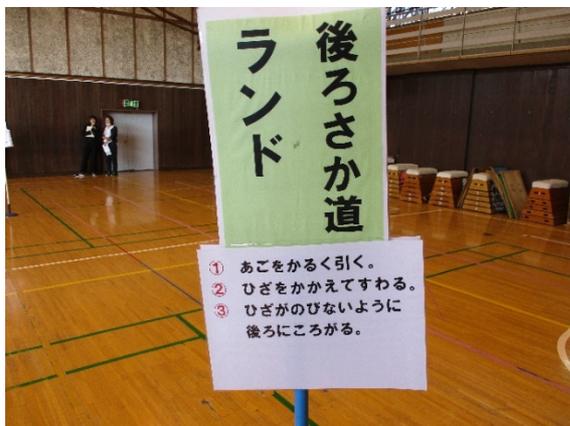
- ・教師が子どもたち一人一人の技の課題を知ることで、支え合いが深まりやすいグループを構成する。
- ・構成されたグループでお互いに技を見合い、友達の上達したところを積極的に伝え合える場を作る。
- ・正確な補助の仕方を指導することで、安心して技に取り組み事ができるようになる。



(3) 基本的な動きや技を身に付けさせる教材教具の工夫

低学年

- ・曲を流し、楽しい雰囲気の中で活動することで、運動の楽しさを味わわせる。
- ・それぞれの動きのポイントカードを置くことで、動きのポイントを自分たちでチェックできるようにする。



中学年

- ・準備運動、補助運動の際は、音楽を用いて児童の気持ちを盛り上げるとともに、動きの特性を掴ませる。
- ・赤白帽子を活用し、到達度がひと目でわかるようにする。
- ・技の到達度にあわせた場をスモールステップで児童自らが設定する。
- ・技の到達度を知るために、タブレットを使いセルフチェックをさせ、技の完成度を高める。



高学年

- ・動きの特性に合った曲を流すことで学習の流れが分かりやすくなり、取り組みへの意欲を高める。
- ・タブレット・手形・足形・ゴムひもなどを使うことで、自分の動きを客観視でき、身に付いた動きを見つけることができるようになる。
- ・上達の段階に合わせた場をスモールステップで設定していく。



5, 今年度の成果と課題

○成果

(1) 仮説①「技の特性を知るための提示の工夫」

- ・単元の導入時に掲示物(写真)で模範演技や動きのポイントを見せることで、ポイントの可視化を図った。
- ・学習カードや技表を基に個々の課題にあっためあてを設定していた。
- ・児童の演示を多く取り上げた。その際、見る視点を事前に与えた。

(2) 仮説②「支え合いが深まる手立ての工夫」について

- ・子ども同士の「ドンマイ」「いいね」の声が聞こえるなど、意欲的に取り組むことができていた
- ・具体的な見る視点をもたせることでお互いに、アドバイスをすることができた。
- ・個人のめあてを付箋に書いて視覚化したことで、児童同士の見るポイントが絞れた。
- ・グループを様々なレベルの児童からなる異質グループにしたことで、技の特性をより知ることができた。
- ・教師が大きな声で、褒めることの重要性が明らかになった。周りの子どもたちがその声かけをまねして、
友達に伝えあう姿が見られた。

(3) 仮説③「基本的な動きや技を身に付けさせる教材教具の工夫」について

- ・児童が自分の課題にあった場の選択をすることは、思考力を高めるひとつの手立てとなった。
- ・タブレットを用いて自分の動きを客観的に見ることで、目指す動きとのズレが分かった。
- ・ゴムひもや手型足型を使用することでポイントを意識した練習ができた。
- ・教員がリズム太鼓の効果的な使い方や、単元に応じた準備運動を行う方法を習得した。

●課題

- ・基本的な技が理解できていない児童が目立った。その状態ではなかなかアドバイスをすることはむずかしい。正しく見とれていないことを、褒めてしまう姿などが見られた。ある程度、教師の教える場面の確保が必要。
- ・着手や技の入り方ができていない児童が多い。逆さ感覚、手支持感覚が足りていない。低学年のころから技の系統性を意識し、計画的に指導していく必要がある。
- ・来年度は全学年で研究授業を実施し、技の系統性を見ていく視点が必要。
- ・グループに一台配置したタブレットに集中しすぎてしまい、お互いの技を見ていない児童も見られた。また、追っかけ再生等を有効に使うためには児童も教員も慣れも必要。
- ・体育の研究として器械運動を取り上げるのであれば、教材教具を揃えていく必要がある。
- ・「支え合う」ためには、協力が必要。児童の個々の課題はグループの課題として捉えさせる手立てを充実させる必要がある。
- ・実技研修が効果的であった。来年度、協議会の講師はできるだけ年間を通して同じ先生に講師として来て頂けるよう調整する。